

小説家の四季 二〇一六年 秋

佐藤正午

今年の夏、八月の平均気温が、九州のいくつかの市町村で観測史上最高を記録したというニュースを聞いて、そうだろうな、と心から納得したのは、僕が住む佐世保でも——七月十八日の梅雨明け以降——連日、延々、お湿りもない炎天猛暑で、今年の夏の手強さをまさしく現場で体感していたからだ。

気象庁の観測と、小説家の体感とを、正確さにおいて一緒にはできないかもしれないが、観測データは毎年、同じ地点で同じ日の同時刻に取られるものだろうし、僕の場合はもう何年も、同じ仕事場で、同じ時間帯に、同じ生地の手シャツに短パン姿で暑さを体感している。しかも今年の夏は、去年の夏と同じ長編小説の続きを書いていた。つまり今年の八月、僕は一年前の八月とまったく同じことをやっていたわけである。定点観測みたいなものだ。

午前中に仕事をはじめようとすると、起床後に着替えたはずのTシャツが汗で湿って重たく感じる

日があった。寒暖計が示している室温は34度。部屋じゅうの窓もドアも開け放つてなるべく冷房なしで小説を書くのが例年の夏の習慣なのだが、さすがに34度ともなると、数字を見ただけでも気持が悪くなる。僕じしんの熱中症も心配だし、パソコンの発熱による故障も怖い。仕事まえに暑さに怖じ気づいてエアコンのスイッチを入れ、窓を閉める。これは記憶では、去年は一度もなかったことである。三時間ほど集中し、文字数にすれば一二〇〇字ほど小説を書き進めて、ふたたび窓を開け放つ。パソコンを休ませ、台所に立ってソーメンを二束茹で——これは毎年恒例——水道水で贅沢に洗って金箆で水を切る。昼食後は、扇風機にあたりながら本を開き、ほんの二、三頁読んでいるうちに昼寝。陽が傾くころを待って買物と、ポケモン採集をかねた散歩に出る。

散歩の途中に、車道から、噴水のある公園内に通じる細い脇道があり、緑の葉を繁らせた木々が左右から枝を差し交わし、ちよっとしたトンネルのようになっていて、いつもそこで立ち止まり、頭の上から降ってくる蟬時雨を聞く。聞くだけではなく、ちよとど片手にスマホを持っているので、ポケモンGOの画面から、録音用のアプリに切り替え、夕方五時過ぎの、まだ盛大な蟬の声を一分ほど保存する。

夜、ガリガリ君だのあいすまんじゅうだので涼を取り、テレビでプロ野球の結果をさらい、オリンピックが始まれば日本選手の成績をさらい、寝る前に蟬の声を録音を、前日録音したものと聞きくらべる。なんの変わりもない。枕元のスタンドを消して就寝。翌朝目覚めると、すでに汗だくでTシャツは重たい。昨日と同じように着替えて、そのあとは以下同文……夕方になると散歩の途中でトンネ

ルの中ほどに佇み、スマホ片手に、目を閉じて、蟬時雨に打たれている。

七月下旬から、八月下旬までまるまるひと月、そんな毎日の繰り返しで過ぎた。

不思議なことに、その間、地元の知り合いの誰からも連絡はなかった。東京の編集者からも電話はかからなかった。みんな夏休みで遠出していたのかもしれない。毎日毎日、樹木のトンネルに入ってスマホで録音と保存の操作をしながら——昨日と同じ、おとといとも同じ、さきおとといとも同じ、持病の耳鳴りみたいに聞きなじんだ蟬時雨を聞きながら——ひよっとして、これ、永遠に続くんじゃないか？と調べてみたこともあった。二〇一六年、今年の夏に終わりはなく、季節はずっと夏のま、死ぬまで、いや、僕は不老不死で永遠に毎日が続いていくんじゃないか？というかも、僕は永遠のループの中に迷い込んでしまったんじゃないか？……それならそれでかまわないんだけどな。誰からも声がかからない、放って置かれる、ただ決まった時刻に決まった日課をこなす、昨日も今日も見分けのつかない繰り返し、地味で平穏な日々が積み重なっていく。こういうの、けっこう、苦にならないたちだし。

でも、もちろん、そういうのはあり得ない。

(あたりまえだ)

八月下旬、昨日までと違う風を感じた。激しい雨の日があり、朝の気温がやや下がった。仕事中は窓を開け放ってしのげる。でもまだ八月だ、夏の続きだ、と未練がましく散歩に出てみても、蟬の声は尻すばみに遠のくばかり。もう録音アプリを立ち上げる意味もない。いや、蟬の声を録音する意味

などもとからない。ある日の昼食時、鍋に湯をわかす段取りの最中に、今日もソーメンか、腹が冷えないか？とふと気が変わり、一日だけ、買い置きのカップラーメンを食べた。不老不死の予定が、気がつく誕生日を過ぎて六十一になっていた。

九月に入ると台風も来た。

台風が長崎県に向かって北上中というその夜、夏のあいだ読みかけていた本をようやく読み終わり、蟬の録音を聞く必要のなくなったスマホで、ネット書店に、前から気になっていた新刊本の注文を入れた。すると配達予定日が表示されて、日付がなんと翌日になっている。念のため時計を見ると、本の注文を確定させようとしているいま、夜十時過ぎである。

(……明日の何時に配達するつもりなんだよ?)

いやいや、そんなに急ぐ必要ないし、と僕はすぐに思った。明日は午後から、年老いた母が独りで暮らす実家を訪問して、愚痴とか泣き言とかをたっぷり聞かされる予定の日で、配達に来られたって受け取れないし。ていうか、あした台風来るし。

注文内容の詳細をよく見ると、「お急ぎ便」のマスにチェックが入っている。それをはずして「普通便」に直してみたところ、配達予定の日付は三日後に変更された。……しあさってか。まあ、欲しい本を注文して受け取る間合いとしてはそんなとこだな、と思い、注文を確定させた。読みたかった本は実際に三日後の夕方、散歩から戻ったときには郵便受けの中に入っていた。

で、このことから、注文した本が、手もとに迅速に届くのはまあいいとして、ただ迅速も度が過ぎると、かえって注文した側が困惑したり、天候によっては配達する側に気兼ねしたりしないか？とか、そもそも翌日配達って、いったいどこから佐世保まで本を運んでくるのか？とか、そういう疑問とは別に、ふと頭に浮かんだのは、昔々、どこから依頼されて、結局、書かなかった一編のエッセイのことである。

本屋への愛を語れ、と原稿の依頼者は言うのだった。

(愛?)

いや、そんなことは言わなかったかもしれない。正しくは、お気に入りの本屋について語れ、だったかもしれない。いずれにしてもこれは昔の話だから、「本屋」などと野蠻に呼び捨てにしているわけで、いまならとうぜん「本屋さん」とか「書店さん」、またはネット書店さんと区別して「リアル書店さん」、さらには「街の本屋さん」とでも呼ぶべきところだろう。でもここは当時の標準にあわせて本屋で通す。

あなたも小説家になるくらいだから本をたくさん読んでいるだろう、本屋にはさんざん通ってお世話になっているだろう、地元でお気に入りの本屋だつてあるだろう、その本屋について何か書いてくださいと、先方は原稿を依頼してきたのだ。ごもつともである。地元の本屋には、中学・高校時代から足繁く通った。本を買わずに見るだけで店内をうろついたり、待ち合わせの場所に使ったりをお世話になったと表現するのなら、さんざんお世話にもなった。お気に入りの本屋だつて、ひねり出せば

ないこともない。だいいち、そういうのは言葉のあやで、厳密な意味では「お気に入り」じゃなくても、これが私にとっての「お気に入り」なんだと主張してエッセイに仕立てることはできるはずだ。

それを僕が書き送ったのは、というか結局、書くことができなかつたのは、他のもろもろの事情は置いて、僕の心にくすぶっていた本屋への不満がいちばんの原因ではなかつたのかと、ふと頭に浮かんだのである。長崎県に上陸した台風がたいした被害ももたらさず通り過ぎた翌々日くらいに。

エッセイの依頼があつた当時、僕は小説家としてデビューして何年か経っていて、もうあんまり本屋には行かなくなっていた。たまに古本屋を覗くくらいで、どうしても読みたくて我慢できない本がある場合は、稀にだが、図書館で借りてきて読んだ。

足繁く通っていた本屋になぜ行かなくなつたかというところ、地元の本屋に常に置かれている本、文学史に名前が残るような作家たちの本、主に文庫本のうち、読みたいものはほぼ読みつくしていたからである。なおかつ僕が読みたいと思う現代作家の本、既刊・新刊を問わず単行本は、僕が読みたいと思う本にかぎって、なぜか地元の本屋は仕入れてくれなかつたからである。

何軒まわっても無駄足だつた。先週出たばかりの小説ですら見つからなかつた。読みたい本を探すため本屋をはしごして、半日つぶれ、行く先々で「注文すれば二週間ほどで届くと思います」と言われる。仕方がないので、言われるまま注文票に氏名と住所と電話番号を記入して、写しを持たされて帰宅。だが待てど暮らせど連絡は来ず、あげくに痺れを切らしてこちらからかけた電話で、「お客

さまがご注文された本、在庫切れです」と言い渡される。これ、同じ目にあつた地方在住のかたは大勢いらつしやると思う。まだネット書店がなく、本屋のみが幅をきかせていた時代、地方の人々はこのようなむごい仕打ちにも耐えなければならなかつた。ほんとうに幾度となく、人々は耐えた。耐えたはずだ。

端的にいうと、もう読んだ文庫本と、あとは話題の単行本しか売っていない。それが地元の本屋である。

すくなくとも当時の僕はそう感じていた。そこへエッセイの依頼が来る。本屋への愛など語れるか？

(愛?)

愛じゃなくてお気に入りでも、そのお気に入りがたとえ言葉のあやでも、本屋について、不満以外に何か語れるか？ 何をどう語っても、積もりに積もつた恨み節、みたいにならないか？

むしろいまなら、と僕は思う。

いまなら、ネット書店への愛を——もう愛でいい——地方在住読者代表として、語れるかもしれない。

断言するけれども、ネット書店で本を買い出して以来、昔はあつた読み逃しが一度もない。読みたい小説があるんだけど本屋にはなく、注文しても在庫切れ、図書館行くのもなあ、原稿の締切も近いし、借りてきて読んでもなあ、また返しに行くの手間だし、やめとくか、そんな無精はただの一

度もない。この作家のこの小説を読みたい、という読者のあたりまえの要望に、ネット書店はあたりまえにしかも迅速に応えてくれる。

そのあたりまえが街の本屋さんには不足している、と言えば、いや、あたりまえはつまらない、あたりまえの代わりに街の本屋さんには偶然の出会いがある、という意見が出るかもしれない。読みたい本があつて店を覗いてみたら、売ってなくて、手ぶらで帰るのもなんだし一冊別の本を買って、期待もせずに読んでみたらすごく面白かつた、新しい作家を発見した！ みたいな幸運。そういうのがあるのはわかっている。昔の僕も何度か経験している。でもいまそういう話はしていない。僕が指摘したいのは単に、読者のあたりまえの要望に漏れなく迅速に答えてくれるネット書店の有り難み、ということである。

ネット書店はさらに、あたりまえの上を行こうとする。夜中にこの本が読みたいと思うと、翌日にはもう読めてしまう。迅速に、どころか、たちどころに本が届けられる。おそらく台風上陸の当日であつても本は届けられただろう。正直なところ、そのへんは僕の要望するあたりまえを超越している。さほど有り難みも感じないのだが、なにしろ、読みたい本の読み逃しがないのが、読者としても、本を書いて読んでもらう側の人間としても、まず、なによりだと思ふ。